

指導資料



鹿児島県総合教育センター

幼児教育 第13号

- 幼稚園，小学校，特別支援学校対象 -

平成19年5月発行

小学校教育との連携

- 教育内容における接続の改善 -

中央教育審議会答申「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について」（平成17年1月）において，発達や学びの連続性を踏まえた幼児教育の充実として，小学校教育との連携・接続の強化・改善が提言されている。この提言は，生きる力の基礎を育成している幼児教育の成果を，小学校教育に効果的に取り入れることを目指したものであり，その具体的な方策として，教育内容における接続の改善を図ることを挙げている。

本県では，多くの幼稚園や保育所，小学校において，幼児と児童の交流を中心に連携が行われている。また，最近では，連携の重要性が認識されるようになり，保育参観や授業参観を組み入れた合同の研修会なども実施されるようになってきている。

そこで，本稿ではこれまでの実践を踏まえ，小学校教育との連携をより一層充実するために，接続の改善について述べる。

1 小学校教育へのなめらかな接続

教員等（幼稚園教諭，保育士，小学校教諭）は，幼児教育と小学校教育の互いの教育の違いやよさを理解し，子どもの育ちの視点に立って，幼

小9年間の教育を見通すことが大切である。また，遊びを通して学ぶ幼児期の教育活動から，教科学習が中心の小学校以降の教育活動へのなめらかな接続を目指して，小学校教育との連携・接続を強化するために，子どもの発達や学びの連続性を構築することが重要となる。

ただし，なめらかな接続とは両教育間にある段差をすべて取り除くことではなく，幼児がその段差を乗り越え成長していくことができるような接続を考えることである。

2 発達や学びの連続性

(1) 発達の連続性

幼児教育，小学校教育共に，幼児児童の心身の発達に応じた教育が行われているが，その間の連続性が保たれているとは言い難い面がある。そこで，教員等は，幼児期から児童期の一連の発達の流れを理解することが必要である。そして，その上で一人一人の心身の発達の理解を深め，幼児教育から小学校教育の指導の継続性を図ることが大切である。

(2) 学びのつながり

教員等は，まず，互いにどのような保

育や授業を展開しているかを理解することから始めなければならない。そして、幼稚園等での経験を生かした教科等の学習の展開にはどのようなものがあるか、また、幼稚園等でのどのような経験が、学習の芽生えとして小学校の学習に生きていくかなど、教育内容の関連を考えていくことが必要である。

3 小学校教育との連携の方法

幼児教育と小学校教育の連携の方法は、表1のようにまとめられる。

子どもの交流では、幼児児童相互に意義

のある交流、つまり、互恵性のある活動が求められるようになり、教育課程への位置付けや活動内容の見直しなどの改善に生かされるようになってきている。

また、教員等の交流では、保育、授業参観だけでなく、参観を基に意見交換を行い、相互理解を深める事例が増えている。

今後、より一層の接続の強化・改善を図るためには、実施可能な連携の方法から始め、徐々に方法を増やし、多面的に連携するようにしたい。そして、最終的には、カリキュラムの連携まで視野に入れて連携を進めていきたい。

表1 小学校教育との連携

連携の方法	意 義	具体的な方策例
1 子どもの交流	・ 幼児は成長へのあこがれと未来の見通しをもてる。 ・ 児童は成長を振り返り、自信と思いやりをもてる。	・ 幼児と児童の相互交流 ・ 合同行事
2 教員等の相互理解	・ 教育内容と教育方法などの相互理解を深めることができる。	・ 合同研修・研究 ・ 保育・授業参観 ・ 意見交換・相互訪問 ・ 相互交流（人事交流）
3 カリキュラムの連携	・ 発達の連続性や学びのつながりを考慮することができる。	・ 発達や学びの連続性を図るカリキュラムの構築
4 その他（家庭との連携等）	・ 学校生活の見通しがもてる。 ・ 不安の解消ができる。	・ 幼児の保護者と児童の保護者の交流、意見交換 ・ 幼児の保護者対象の授業参観・保護者会・後援会・入学説明会など

4 発達や学びの連続性を考慮した交流

(1) 年間指導計画の作成

A 幼稚園は、小学校に併設している2年保育の公立幼稚園である。日常的に児童との交流を実施しやすい環境であることを生かして、児童期へのなめらかな接続を図るために幼小交流活動計画(図1)を作成し、実施している。単に交流経験を増やすのではなく、活動ごとのねらい

を設定し、幼児にとって意義のある活動になるようにしている。この計画を、随時改善しながら経年で実施していくと、たとえば、幼児は他者とのかかわり方を学ぶことになり、その経験が小学校の学習に生きていくことになる。

また、交流活動計画を年間指導計画に載せることにより、1年間を見通した保育ができ、交流活動間の関連を図りながら指導することもできるなどの教育効果

を期待することができる。

A 幼稚園では、作成に当たって、生活科、保育両方のねらいが達成でき、幼児児童双方にとって互恵性のある交流活動になるように、小学校教諭の意見を参考した。また、小学校も幼稚園教諭の意見を基に、生活科指導計画を作成した。幼小4年間の交流活動計画ができたのである。

る。作成を通して、各教諭は互いの教育のよさと違いを理解できたようである。

今後は、遊びの中での興味や関心に沿った活動から、興味や関心を生かした学びへ、さらに、教科等を中心とした学習へのつながりを考慮して、実践後の評価を基に、子どものよりよい育ちを目指して改善を続けることが大切である。



図1 幼小交流活動計画(一部抜粋)

薩摩川内市立入来幼稚園指導計画を基に作成

(2) 交流活動の工夫

下記の実践は、保育所6歳児とT小学校1年生の交流活動である。事前におもちゃづくりを一緒にして、幼児児童の個々の交流を図った上で、本時で遊ぶという設定である。交流の回数を多くするなど、小学生と一緒にでも、幼児が主体的に活動できるように配慮している。

また、指導案に幼児児童の活動の流れや保育士、小学校教諭の指導などを入れることで、互いの役割や幼児児童への援助などを見通すことができ、声掛けに生かす等、きめ細やかにかかわることができる。そして、実際の活動の中で保育士、小学校教諭共に子どもの発達や学びの違いを実感することができる。

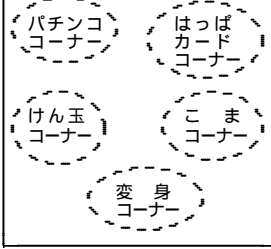
1 活動名「あきとあそぼう」 2 交流する子ども 保育所幼児（男児4人 女児5人 計9人） 1年生児童（男子17人 女子13人 計30人） 3 目標 (1) 身の回りにある材料を使って作った遊ぶ物を友達と見せ合ったり、教え合ったりして楽しく遊ぶことができる。（1年生） (2) 自然物に興味を持ち、工夫して作ったり、遊んだりすることができる。（幼児） (3) おもちゃで遊ぶ活動を通して、相互にコミュニケーションをとったり、協力し合ったりすることで、交流を深めることができる。（幼児と児童の交流）				
幼児に対する援助の留意点	時間	予想される子どもの活動	児童に対する指導上の留意点	環境の構成と準備等
・ 保育者自身が楽しんで指遊びをし、交流活動への幼児の関心を高めるようにする。 ・ 1年生の読むめあてを聞き、おもちゃランドへの期待をもてるようにする。 ・ めあてや約束などについて幼児なりに理解できるように、説明を付け加える。	意欲をもつ 7分 遊ぶ 45分	1 おもちゃランドについて確認する。 ・ 指遊びをする。 あきの「おもちゃランド」でたのしくあそぼう。 ・ おもちゃランドの約束仲良く協力して遊ぶ。安全な遊び方をする。 ・ チャレンジカードの説明を聞く。 ・ ランドマンと客が交代する時刻と合図の確認をする。 2 おもちゃコーナーの紹介をする。 ・ どんぐりごま ・ パチンコ ・ けん玉 ・ 変身 ・ はっぱカード 3 秋のおもちゃランドで遊ぶ。 ・ ガイドと客に分かれて活動する。	・ 指遊びに秋の素材を取り入れ、活動への意欲を高める。 ・ 交流活動のめあてを提示し、声に出して読ませ、意欲を高める。 ・ ランドマンと客の交代は音楽が流れたときであることを確認する。 ・ おもちゃコーナーの代表が元気づけ紹介できるように、励ます。 ・ ランドマンが元気づけ客を呼び、幼児の立場になって遊び方を教えられるように声掛けをする。 ・ 自信をもって幼児に声を掛けたり、相談にのったりできるように、ランドマンを励ます。	・ グループごとに整列。 ・ おもちゃの配置。 ・ チャレンジカード ・ <各チャレンジコーナー> ホワイトボード  ・ 役割を明確にするためのバシダン ・ BGM（活動時、交代の時、片付けの時）

図2 「あきとあそぼう」指導案

日置市立鶴丸小学校の指導案を基に作成

5 なめらかな接続を目指して

幼児教育は、多様な活動を経験させることによって幼児の好奇心や探究心を養い、生涯にわたる学びの基礎を作っている。いわゆる、「^{あと}後伸びする力」をはぐくんでいるのである。幼稚園教諭、保育士は、幼児教育の専門家として、この力が、小学校以

降でどのようにはぐくまれていくのかに関心をもち続けることが大切である。そして、小学校教諭と共通の展望をもって連携し、子どもたちの成長を支えることが望まれている。

【参考文献】

国立教育政策研究所『幼児期から児童期への教育』平成17年

（教職研修課）